

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 5 月 15 日現在

機関番号：13902

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2014～2016

課題番号：26381195

研究課題名（和文）国語科の授業における「語り」分析の有効性に関する実証的研究

研究課題名（英文）A Empirical Study of Narrative Analysis in Japanese class.

研究代表者

丹藤 博文（TANDOH, Hirofumi）

愛知教育大学・教育学部・教授

研究者番号：70523380

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,300,000円

研究成果の概要（和文）：2012年中学校国語教科書に「語り」を問う学習課題が初めて登場した。しかし、国語の授業ではいまだに「作者」が問題とされ、「語り」とは何か、なぜ「語り」を用いなければならないのかについては理解されてもいない。テキストの語りを読むことの重要性を確認したうえで、主にジェラルド・ジュネットの研究を参照し、指導過程として定式化した。実際の教科書教材を用いて上記の方法に従った教材分析を行い、語り分析の指導過程の有効性について検討した。さらに、それら指導過程によりながら、中学校の教員に実際に授業を行ってもらった。「語り」を問題とすることで、生徒の読みは深まっていったことが明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：In 2012, the assignment of narrative was inserted in the Japanese textbook of junior high school for the first time. But in Japanese class, many teachers and students don't know what is narrative or why we must use it. Therefore I showed the importance of reading narrative and the process how to read using the theory of Gerard Genette. I demonstrated the literary texts analysis in Japanese textbooks and the validity of the educated programs of narrative analysis. The program with junior high school teachers, as a result, I could have evidence that assignment narrative well for reading literary texts.

研究分野：国語科教育（文学教育）

キーワード：物語論 語り フランス教科書 指導過程

1. 研究開始当初の背景

2012(平成24)年、中学校国語教科書に「語り」を問う学習課題およびコラムが初めて掲載された。義務教育段階においても、「語り」が読みの方法として取り上げられたのである。しかし、中学校の生徒はもちろん教員も「語り」とは何か、なぜ「語り」を読むことが必要なのかについて理解しているとは言い難いのが実態である。

2. 研究の目的

「語り」を読むことが、国語の授業において、なぜ必要なのかについて、その意義を明らかにし、「語り」を読むための具体的な方法を指導過程として示す。そのことで、国語の授業における文学教材を読み深められるようにする。

3. 研究の方法

(1)言語学・文学研究・哲学・歴史学・社会学・心理学・教育学等、他の学問・領域において物語や「語り」がどのように意味づけられているかを明らかにする。

(2)物語論の先進国であり、「語り」を授業に取り入れているフランスの中学校国語教科書において、「語り」がどのように扱われているのかを明らかにする。また、フランスの国語教育の文献にあたり、「語り」を読むことが、どのように意味づけられているかを調査し参考とする。さらに、フランス語の授業を参観し、フランスの国語の授業について理解する。

(3)教材研究レベルで、「語り」を意識した読みの方法について、実際の教材をもとに分析する。また、中学校の国語教員と共同で、「語り」を読む授業を実施してもらい、指導過程を検討する。

(4)主に、ジェラルド・ジュネットの物語論をベースとして、日本の国語の授業において、「語り」をどこまで取り入れられるか指導過程として対案する。立案された指導計画にもとづいて実際に授業を行う。

4. 研究成果

(1)言語学・文学研究・哲学・歴史学・社会学・心理学・教育学、それぞれにおいて「物語」が主要なテーマとして研究されていることがわかった。「物語」は文字を使用する頃から、人間と不可分な対象であり、それゆえ、哲学から教育まで、あらゆる領域において研究の対象となるものである。現代においても人々は「物語」を好んで制作・享受しているばかりでなく、「物語的理解」「物語的図式」に依存しつつ、認知・認識しているのである。例えば、臨床心理学では「ナラティブ・セラピー」が治療方法として用いられており、医学でも「エビデンス」ばかりでなく、「ナラ

ティブ」の重要性が強調されているように、物語・「語り」を積極的に取り入れている。このことは、実際の授業においても念頭に置かなければならないのであって、教育もまた、ある意味で物語化しているという視点は重要である。

(2)フランスの中学校国語教科書を調査・研究してわかったことは、コレージュ1年生(日本の小学校6年生)からすでに、読みの方法としての「語り」を扱っているということである。もちろん、教科書によって扱いの仕方には差異がある。1年生の当初から「語り」をはじめとした読みの方法論を教えようとする教科書もあれば、付録として掲載するものもある。いずれにしても、「語り」は、日本の中学校段階で教えることになっているのである。「語り」という方法を身につけさせて、自力で読ませようとしている態度は日本と異なる点だと言えよう。フランスでは、方法を身につけさせ、自ら読んで考える、そして議論したり発表したりすることが一貫して求められているのである。日本では、歴史的に形式主義と内容主義の統合ということが問題とされるが、フランスでは内容主義はある意味で切り捨てていると言ってもいいだろう。もちろん、フランスの教科書がすべての点においてすぐれていると言いたいのではない。なかには、疑問を覚えるような点もある。例えば、ホメロスから現代作家まで網羅的に掲載しようとするあまり、テキストは断片的であり、作品として扱ってはいない。しかし、これは、授業において、どのような力を身につけさせようとするか、つまり、目的の違いによるだろう。フランスでは、「バカロレア(大学入学資格試験)」の対策のために、どうしても文章を書かせることに習熟させなければならないという事情もあるに違いない。日本のセンター試験のように、マークシート方式とは自ずと違ってくることは自明である。読み・書きの方法を身につけさせる、「学び方を学ぶ」という思想は、今後の日本の国語教育にとっても参考となると言ってもよい。

(3)物語論(Narratology)は、ロシアのウラジミールプロップ『昔話の形態学』(1928年)を嚆矢とし、フランスの構造主義者として知られるレヴィ・ストロースが批判的に紹介し、ツベタン・トドロフが「ナラトロジー」と命名したことから、世界的に活況を呈した学問・領域である。ロラン・バルト『物語の構造分析』、ポール・リクール『時間と物語』などは、日本でも広く読まれた。なかでも、ジェラルド・ジュネット『物語のディスコース』は世界的な評価を得ている。本研究においても、ジュネットの物語論を参照した。ただし、ジュネットの研究は、物語に関する包括的・体系的なものであり、精緻である分、そのまま学校教育に取り入れることはでき

ない。エッセンスは外さないように留意しながらも、簡略化し、わかりやすいように指導過程として立案した。指導過程は以下の通りである。

(4) 語りの指導過程と有効性

物語内容を一文でまとめる。

テキストの特徴、表現の特色をとらえる。

語りの方法を把握する。

読みを交流する。

感想文・意見文をまとめる。

これを、以下、中学校2年生の定番教材『走れメロス』を対象として具体的に述べる。

メロスが王との約束を果たすために、必死で走り戻ってきた話。メロスが王との約束を果たすことで、正義と友情はあることを王に示した話、など。これは、子どもやグループによって多様である。それだけ、その子どもがどの点に関心を示しているのかを知る手がかりともなる。

『走れメロス』には、作者である太宰治が参照したとされる、シラー『譚詩』中の「人質」があることが知られている。「人質」と比べ読みすることも、『走れメロス』の語りの特徴を知るうえで有効である。

『走れメロス』の語りの特徴は、以下の通りである。冒頭「メロスは激怒した」で始まる。所謂三人称全知の視点である。しかし、メロスが不貞腐れる場面になると「私は、ここまで努力したのだ」とある。語り手は登場人物メロスと一体化するのである。それが、再び走り出すと「走れ！メロス」となっていて、語り手はメロスの外に出ることとなる。つまり、語り手は、登場人物メロスの「内外」と視点を変えるのである。このことが、読者を登場人物に感情移入させることに効果を持つように仕掛けられているのである。

複数の実践論文によると、中学校の授業における『走れメロス』の読みは次の三つのタイプに分類できる。

a 素直に感動を表明するタイプ。

b 現実にはあり得ないとする批判的なタイプ。

c どちらとも言えないとし、a・bの折衷的なタイプ。

学校の授業では、「友情・信実・メロスの自己変革」を主題として教えられようとしている。つまり、「a」を前提としているのである。しかし、必ずといっていいほど、『走れメロス』には、「b」の読みがあることも事実である。授業では「b」の読みは、読めていないとされているが、果たしてそれでいいのかということが問題となる。そこで、示唆的なのは、あげた「人質」という先行するテキストの存在である。『走れメロス』とシ

ラーの「人質」を比べ読みさせると、批判的な生徒たちも、「人質」になら「友情」や「信実」を読むことができると率直に支持することが報告されている。このことはどう解釈すればいいのか。読みの交流で、中学生たちに考えさせたいところである。

授業では、「友情・信実・自己変革」を主題として読まれている一方で、批判的な読みをする中学生も一定の割合でいることをどうとらえたらいいのか。このことを判断するためには、語り分析が有効である。語り手は、複数の箇所、矛盾や齟齬をきたすことが明らかになるからである。「a」とする生徒たちは、『走れメロス』に「人質 譚詩」のごとき「物語」を読み、「b」の生徒たちは、小説を読んでいるからである。

『走れメロス』という具体的な教材をもとに、これまで述べてきたように、語りを読むことは、素朴な感想や内容ばかりに拘泥する読み方から、テキストのメタレベル、すなわち深い読みへと誘う有効な方法であることが実証的に明らかとなった。

(5) 報告書

本研究の成果を『平成 26~28 年度 科学研究費補助金・基盤研究(C)研究成果報告書 国語科の授業における語り分析の有効性に関する実証的研究』(2017年3月)として刊行した。以下、目次を掲載する。

序説 国語教育における言語観批判

言語論的転回・物語・語り

1 なぜ語りなのか

2 物語の創造と解体

3 語りとは何か

4 語りの批評性

5 テキストと分析

語りを読む文学の授業

1 読むことの課題

2 教室で読むための語り分析の方法

3 フランス中学校国語教科書における物語分析の研究

語りを読む教材研究

1 語りと他者 - 『ごんぎつね』と『おにたのぼうし』 -

2 存在の内と外 - 『おにたのぼうし』 -

3 語りの方略を読む - 『大造爺さんと雁』 -

語りを読む授業の研究

1 語りに着目した読みの指導 - 『みどり色の記憶』 - (上條 聡)

2 対話を促す語りの授業 - 『字のない葉書』 - (本田敏倫)

3 語りによる読みの深まり - 大学生が読む『ごんぎつね』 -

文献

初出一覧

あとがき

索引

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計5件)

丹藤博文、教科書における語り分析の研究 -フランス中学校国語教科書を対象に-、愛知教育大学教職キャリアセンター紀要、査読有、第1号、2016、59-65

<http://hdl.handle.net/10424/6604>

丹藤博文、存在の内と外 -『おにたのぼつし』の語り分析-、国語研究、査読無、第24号、2016、47-59

<http://hdl.handle.net/10424/6404>

丹藤博文、「情報化/消費化社会」における文学と教育、国語の授業、査読無、No.257、2016、74-79

丹藤博文、語り がひらく読みの地平、月刊国語教育研究、査読無、No.514、2015、4-9

丹藤博文、教室で読むための語り分析、国語国文学報、査読無、第73集、2015、35-51

〔学会発表〕(計4件)

丹藤博文、教材としての宮沢賢治、愛知県西三河高等学校国語教育研究会(招待講演) 2016年11月29日、愛知県知立市文化センター(愛知県・知立市)

丹藤博文、言語能力を高めるための文学教材の指導、青森県南地方小学校教育研究会国語部会(招待講演) 2016年7月25日、藤崎町ふれあいずーむ館(青森県・南津軽郡)

丹藤博文、物語と小説の指導について、愛知県瀬戸国語研究会(招待講演) 2016年8月25日、パルティセと(愛知県・瀬戸市)

丹藤博文、教科書における語り分析の研究 -フランス中学校国語教科書を対象に-、全国大学国語教育学会、2015年10月24日、創価大学(東京都・八王子市)

〔図書〕(計3件)

丹藤博文他、愛知教育大学出版会、教科開発学を創る 第1集、2017、162

丹藤博文他、明治図書、国語科重要用語事典、2015、277

丹藤博文他、一藝社、教科教育学シリーズ 01 国語科教育、2015、212

6. 研究組織

(1)研究代表者

丹藤 博文 (TANDOH Hirofumi)

愛知教育大学・教育学部・教授

研究者番号：70523380

(2)研究協力者

上條 聡 (KAMIJYOH Satoshi)

愛知教育大学附属名古屋中学校・教諭

本田敏倫 (HONDA Toshimichi)